

# 近世的旅觀の形成

— 伊勢参りの旅 —

鎌 田 道 隆

## 一 はじめに

江戸時代の庶民たちの思想と行動には、目を見張るべきものがある。庶民という語もあいまいであるが、ここでは為政者ではないもの、町人や農民などの生業従事者という位の意味を持たせておこう。その生業の発展に裏付けられた経済生活の向上が、人間としての生きる喜びを保障し、豊かな庶民文化を開花させたのが江戸時代の一特質である。具体的には、衣食住の充実はもとより、芝居や歌謡などの芸能を楽しんだり、浮世草子などの小説を読んだり、浮世絵などの絵画を鑑賞したり、旅に出かけたり、子供に教育を施し玩具を買い与えるなど、幅広い領域において、生活の喜びを享受する情況に、積極的なかかわりを持つ姿

が、江戸時代の庶民にはある。

そうした日常生活のなかに生き甲斐文化を切り拓いてきた庶民生活から、ここでは旅についてとりあげて検討する。江戸時代の庶民の旅にも、社寺参詣の旅、商用の旅、病氣療養の旅、遊山の旅、流浪の旅など、いろいろな旅がある。江戸時代に入る前の日本語について知ることのできる『日葡辞書』にも、「旅」に関する言葉が数多く収載されている。たとえば、「旅」は他行すること、見知らぬ土地などを歩き回ること、「旅人」は他国の人、あるいは自分の家をおとにして歩き回っている人、「旅寝」はよその場所、すなわち自分の家以外の所で寝ること、「旅人屋」はよその人あるいは他国の人を泊めることになっている住居、または宿泊所、「旅装束」は旅行する時の服装、あるいは着物、「旅

やつれ」は、旅行したり巡歴したりすることによって疲れたり瘦せたりすること、などとある。

中世後期に旅が広く行なわれており、旅に関する言葉も共有されていることが、この『日葡辞書』からもうかがえるが、まだ旅が楽しいもの、庶民に好まれる行動という意味を見いだせない。のちに述べるように、江戸時代の庶民の旅のような時間や金銭を工面してでも出かけたものの、自己の向上やリフレッシュのために必要なものとしては認識されていないのが、『日葡辞書』に表現された旅観ではないだろうか。

それでは、旅は楽しいもの、頑張つて働いてでも出かけた旅といった近世的な旅観は、どのような種類の旅であったのだろうか。結論からいえば、それはいわゆる伊勢参りの旅ということになろう。四国八十八所めぐりの遍路旅や、西国三十三カ所廻りなどの霊場めぐりなどの巡礼の旅も、近世庶民の代表的な旅ではあるが、これらの聖地・霊場めぐりの旅には、誓願や祈願などの信仰性が強く、旅の途中に娯楽的要素が一部入り込むようになるけれども、伊勢参りのような解放的な旅になりきることはなかった。

江戸時代の伊勢参りには、伊勢神宮の御師たちの布教活

動と結びついた伊勢講の旅があるが、伊勢講とは直接的なかわりをもたないおかげ参りなどの旅もある。おかげ参りは、父母や勤務先に無断で参宮へ旅立ってしまう拔参りの性格が強く、流行性や非計画性があり、いわゆる楽しい旅としての伊勢参りの盛行に強く影響されている面がある。本稿においては、伊勢講の旅を旅日記を中心としながら、その実例のなかで検証していく。

江戸時代には、旅のことを道中という言葉で表現する。家を出てから目的地に至るまでの道中（みちなか）こそが旅の意義だということを示したすばらしい歴史用語である。参宮道中日記を見ていくと、目的地である伊勢でのごく接待のシステムの構築も高く評価されるものの、それ以上に日本全国各地の地域文化の個性の高さが注目される。伊勢参宮とは、こうした道中の見聞・学習の機会獲得であったということができないのではないか。

## 二 旅立ちの準備

参宮道中記は、多くの場合出立の日からの記載となっている。しかし参宮の旅立ちには抜け参りでない場合、かな

らず何らかの準備がなされるのが普通である。なぜなら一人旅の事例はほとんどなく、複数あるいは数十人のことが一般で、この場合にはさまざまな企画・準備作業が必須と考えられるからである。

とりわけ村単位・組合単位の伊勢講などの場合には、旅の企画は合議で決定され、準備作業は旅の参加者または地域社会全体での分担で進められるのが通念である。

そうした村共同体の伊勢講の準備過程を知ることができ、その史料が、奈良県の『安堵町史』史料編下巻に収載されているので、紹介をしながら、集団伊勢参宮の企画・準備を整理してみよう。『安堵町史』所収の史料は、大和国平群郡東安堵村、すなわち国中くなくちとよばれる大和盆地中央部の農村史料である。収載史料は天明四年（一七八四）三月の「伊勢参宮道中之記」<sup>3</sup>、寛政三年（一七九一）の「伊勢参宮諸事覚帳」<sup>4</sup>、文化元年（一八〇四）「伊勢参宮三元縮帳」<sup>5</sup>と、ほかに西国めぐりの道中記など数点を翻刻している。

伊勢参宮の準備光景を記録しているのは、寛政三年「伊勢参宮諸事覚帳」である。表紙には「寛政三年亥四月六日発足」「講宿源右衛門」「支配人源右衛門・権兵衛」の記載が見える。本書によると、発端は「講田地作徳」が「相応」

によかったのでこの寛政三年の参宮について、まず両支配人の相談で三月八日に世話人六人の会議、ついで十五日に講中全員による会議を開いて参宮の決定をする計画をたてた。しかし世話人六人の集合が都合つかずに十四日夕方打ち寄り、日程や留守見舞土産無用、参宮時の絹類着用無用等々を審議して決めている。十五日には惣講中の集まりということ、お酒や振舞料理も供した上で、講中参宮について相談にかけたところ、いずれも、「可燃様被申」て、日柄のよい四月六日の出立が決定された。

三月十七日から参宮の準備・手配が始まったが、参宮道中で使う雨具の笠と蓑、荷物運搬のための馬の確保が急がれて、値段もなるべく安くつくように検討されている。笠と蓑は安く詵えるように取り決め、馬三匹は郡山の馬借などと交渉して馬と馬士を選び、馬士の笠・蓑や馬荷用のつづらなども郡山の道具屋などに手配、その他銅葉や馬関係の諸準備がなかなか煩雑だったことが、この記録からうかがえる。講支配人たちは、何度も会合を開いて、準備作業の進捗を目配りして、借物や買物の値段決定や支払いの約束をしている。講全体としては、出発前日の四月五日に極楽寺を頼んで「おはけ」の行事をおこなって、神楽をあげ

て講衆が参会している。

東安堵村の伊勢講の場合、前掲の天明四年の史料では、「をバた」のところで、「此宿米や市兵衛と云宿屋のユに掛り、廿人此米やに行て宿ル」とあるので、参宮者が二十人だったかと考えられるが、寛政三年の「伊勢参宮諸事覚帳」では、笠と蓑を四十八人分揃えているので、馬方三人を含めた総参宮者は四十八人と考えられる。また文化元年の「伊勢参宮元締帳」では、参宮者二十七人とほかに荷持ちが四人いるので、合計は三十一人である。年度により東安堵村伊勢講の参宮者は二十人から五十人規模とかなり変動があるが、参宮者の多い年には、準備作業も大がかりであったことがうかがえる。そして何よりも十八世紀後半から十九世紀初めの大和国東安堵村の場合、参宮者の笠・蓑などの旅道具が、普段使用している笠や蓑とは別に、参宮用に新調しており、駄馬も借り賃を支払っての借り馬であったことは注目しておきたい。また大和からの伊勢参宮に、駄馬を三匹も雇い入れる参宮のスタイルとはどんなものであったかも、今後の検討課題であろう。ちなみに文化元年の二十七人の同村伊勢講では、荷物持ち四人が雇用されている。

寛政三年四月六日の東安堵村伊勢講では、「発足之朝夜

七ツ時、村中かいふき廻り可申候、是ハ村幸七ニ渡し置申候、但シ両度ふき廻らせ可致候」とあり、ほら貝を二度吹き廻って、村からの伊勢講の立出を周知させる、重要な村の行事であった。

共同体などの行事としての伊勢参宮の準備は、地域により時代によって差異はあるもの、おそらく東安堵村の事例のような経過をたどったと考えられる。もちろん参宮者個人にとつての準備は、初心者、旅慣れた者など、それぞれに当人の旅の学習や心の準備もなされ、また肉親や隣人たちの対応もあつたと思われるが、実態を示す史料は少ない。

家族や知人との数人から十数人までの個人的な参宮旅行の事例は多いが、ほとんど準備が公的でない分記録として残されにくい。出発後の日記に記される土産物の購入などから、出発準備中に周囲から寄せられた饒別や知識供与などの協力があつたことが推測される。

のちに紹介するのであるが、弘化二年（一八四五）に武蔵国から三カ月におよぶ旅に出た田中国三郎が、『参宮祝儀受納帳』を残している。これによると出立前に近隣の知人など三十三人から、合計一両二朱と錢五貫六百元を祝儀

として受け取っている。三十三人分は地名と名前と祝儀金額が記され、名前には女性名や寺院名などもあり、金高も二〇〇文から金百疋まで差異がある。いずれも国三郎個人が頂戴したものと考えられる。また本帳には「見立入用覚」という記載もあり、半天、襦袢、股引、脚半、かっぱ、笠、風呂敷などの旅装束に金三分二朱と二貫四十文の出費予定や、見送り人との酒宴費用二貫百二十文、そのほか諸祝儀などの支払を、合計金一兩二分二朱と錢九六二文に見積ったことが記録されている。国三郎は弘化二年には二十四歳で、代々村の年寄役の家柄で、その後継と目されていたようであるから、旅仕度もかなりの準備をしたのであろう。

こうした旅の準備を整えての出立が一般的であるが、事情によつては参宮であることを隠して、旅仕度が充分に出来ないかたちで出かけなければならないこともあった。安政二年（一八五五）に出羽国田川郡から母を同道しての伊勢参りを企画した清河八郎の旅日記『西遊草・清河八郎旅中記』によると、事情は複雑である。孝養心から母を参宮へと誘い、母の姉をも同道させる計画であったが、遠距離にわたる旅行となることや、親族内での不安や庄内藩経済による特定の事情などがあつて参宮は反対された。そこで、

母を連れての菅谷寺不動堂参りという近国への親孝行の小旅行という名目で旅立った。伯母は途中から連れ戻されるという雰囲気の中の旅立ちであつたから、出発準備も見送りも簡単にせざるを得なかつたという。

### 三 参宮の日程と周遊地

伊勢神宮近辺の町や村では、地域の代表者だけでなく、ほぼ全員がそろつて参詣する総参宮も可能であるし、宿泊を伴わない日帰りということも考えられるが、江戸時代の徒歩による参宮では、多くの場合、数日から数カ月の日程と、単なる往復ではない回遊型ともいべきコースをとることが多い。

前節で、参宮の準備過程を紹介した大和国東安堵村の伊勢講の場合を見てみよう。天明四年（一七八四）三月の『伊勢参宮道中之記』では、一日目が東安堵から大和盆地をほぼ東進して、榎本から東山中へ入り、福住から笠間を抜けて名張まで、二日目が名張から青山峠越（阿保越）で、伊勢路、垣内、大和戸、二本木泊り、三日目が二本木から八太、六軒、松坂、櫛田、明星（新茶屋）泊り、四日目には小俣

から宮川を経て昼前に御師橋爪孫太夫家に入り、午後には  
両宮廻りをしている。五日目は参詣ののち、松坂へ戻って  
宿泊している。六日目は、松坂から六軒まで戻るが、ここ  
から往路とは道を変えて参宮街道を津へ抜け、津から別街  
道に入って、窪田、椋本から関へ出て東海道に入り、この  
日は坂下で泊り。七日目は鈴鹿峠を越えて土山、水口、石  
部、目川、草津にて泊り。八日目は、草津から瀬田、大津  
を経て山科・醍醐から六地藏、宇治を通って長池泊り、最  
終日の九日目は玉水から藪の渡りで木津川を越え歌姫から  
郡山へ出て帰宅している。

東安堵村の伊勢講では、天明四年の旅程は、ほぼ踏襲さ  
れていたようで、文化元年（一八〇四）の「伊勢参宮元締帳」  
でも、ほとんど同じである。変更があったのは、二日目が  
八太の泊り、三日目は小俣から二見へ廻つての宿泊、四日  
目は伊勢の御師橋爪孫太夫宅で変つてはいない。六日目が  
東海道に出た関宿の泊り、七日目が石部の宿泊となつてい  
る程度の変更である。宿泊地の変化は、宿屋側の事情か参  
宮者側の都合によるものであろうが、理由は判然とはしな  
い。また、東安堵から伊勢神宮への往路と同じ道筋を利用  
すれば旅程も短くなるのであるが、あえて東海道廻りの復

路としてゐるのは、村の伊勢講が純粹の伊勢信仰だけで成  
り立っているのではなく、講員たちの見聞を広める意味に  
もなつてゐたのではないかと推測できる。

伊勢参宮と称する旅の日程や周遊コースなどについて  
は、東京都世田谷区教育委員会刊の「伊勢道中記史料」（昭  
和五十九年三月）で、池上博之氏が詳しい解説をしている。  
この先行研究によりながら、弘化二年（一八四五）の三カ  
月にもおよぶ大旅行の日程と周遊地を概略再掲してみよ  
う。

弘化二年正月二十二日に世田谷の喜多見村を出発した田  
中国三郎らの伊勢参宮一行は、川崎宿で中食のあと、一日  
目を戸塚で泊り、以後東海道を西進して、二十四日には箱  
根をこえて、二十六日には久能山、二十七日には駿河府中  
から二十八日には大井川を越えて掛川宿、掛川からは秋葉  
山、鳳来寺を経て、二月三日には日を合わせたのか三河の  
豊川稻荷の初午を訪ねている。五日には宮の熱田大神宮を  
参拝し、名古屋城の金の鯨鯨を突見、六日は甚目寺から佐  
屋を経て、船で桑名へ着し、相の宿の富田で宿泊している。  
七日からは日永の追分から参宮街道へ入って、津・松坂、  
そして二月八日の午後には伊勢の御師龍太夫宅に到着。伊

勢では両宮および末社、天の岩戸、朝熊、志摩の磯辺、鳥羽、二見などゆっくりと参拝や見物をして十二日に御師宅を出て申田泊、十三日から月本、長野峠越えて伊賀上野から嶋ヶ原、山城笠置を通過して十五日に奈良入り。十六日は奈良見物、西の京、郡山、法隆寺前まで。龍田、石光寺、当麻寺からは東へ向かって三輪、初瀬、飛鳥、多武峯、吉野へと大和めぐりをして十九日宇野泊。二十日から紀州に入つて、橋本から高野山、二十二日に粉河寺、二十三日に紀三井寺から和歌浦、和歌山城下を経て紀州加田へ。二十四日は粟島社参拝のあと泉州へ。二十五日には堺、住吉、大坂へ入り、翌日は大坂の芝居見物ののち船に乗り、二十九日午前四国の丸亀着。四国では、道隆寺、弥谷寺、曼茶羅寺、本山寺などの札所や金毘羅大権現を参拝し、讃岐から伊予国に入つて石手寺から道後温泉に入湯。二月五日夕刻に乗合船で四国を出て、六日音戸の瀬戸を通り七日に安藝国宮島へ渡っている。宮島では厳島神社など詳しく見物、二月九日この旅行での最西端周防国岩国の錦帯橋を見て、その日のうちに乗合船で広島へと帰路についた。十一日には備後国三原、十二日神辺、十三・四日も備中路で吉備津宮から備前路、十五日には播州に入るが、備後・備中・備前では

道中記の記述量がかなり少なくなっている。国三郎は山陽路を「長崎道中」と記すが、進路は逆方向である。播州路は、その松や高砂相生の松をはじめ伝承と景観への興味を満足させながら、十九日に摩耶山から西宮へびす社を経て、四国へ渡る前に泊つた大坂道頓堀の大和屋弥三郎まで辿りついている。大和屋弥三郎に三泊して大坂を見物、二十三日淀川を船で山城の淀へ出て宿泊、翌二十四日は石清水八幡宮、宇治、平等院・三室戸寺を参拝、伏見の稻荷前で宿泊、二十五・六日は京見物、二十七日は下鴨・上賀茂社、貴船・鞍馬から八瀬にて泊り、二十八日比叡山から坂本へ下り、唐崎、三井寺、石山寺、二十九日は石山から草津へ出て、中山道へ入つて能登川で宿つた。

四月朔日は彦根城下を見物して、二日には竹生島へ渡り、西国三十番の札所を参拝、三日には中山道関ヶ原宿へ戻り、四日赤坂から谷汲山華厳寺へ廻つて西国三十三番の札所の打留、そして中山道加納宿に戻り、六日中津川、七日須原、八日奈良井と若干の寄道をしながら進み、九日には洗馬から松本道（善光寺道）へ入つて、十一日には善光寺に参拝している。十二日には篠井追分から坂本宿を経て十三日中山道追分宿、十四日には上野国に入つて坂本宿を通り、横

川の関所から明義山へ廻り、中山道松井田からまた榛名道に入り、十五日に榛名社参拝、伊香保入湯、十六日も揚弓、入湯などで休養、同じ宿に連泊、十七日に高崎から武蔵国本庄に出て宿泊、十八日は蓮生山熊谷寺に参り、十九日は桶川・浦和・わらび宿などを経て江戸に入り、雑司谷鬼子母神を参詣して池尻の親戚宅到着。二十日は昼前に池尻を出て、出発時に酒宴した野田清兵衛の店で帰着の祝酒を飲んだあと、午後三時ころに「目度帰宅」している。

田中国三郎の旅は往復八十七日を要しているが、整理してみると以下のようなものである。一月二十二日出立から、ほぼ東海道を西へ十六日目に伊勢に入り伊勢で四泊、十二日から伊賀越えて奈良に入って大和廻りから紀州・泉州を経て大坂入り。伊勢出立から二十五日目で四国への船旅となり、二十九日の丸亀から四国の讃岐・伊予の旅を七日間して、三月五日からまた船路で安芸の宮島へ、最西端の岩国錦帯橋まで四十七日を要している。広島から山陽路を辿り、大坂で三日、京都で三日の見物をして、近江では彦根や竹生島を訪ねて、以後は善光寺参りなど若干の寄り道はあるものの、基本的には中山道を経由して、帰路四十日間の旅であった。

この大旅行の全行程を田中国三郎ら一行全員が踏破したのかどうかは、明らかではない。伊勢講の旅であれば、伊勢宮への参詣は全員行くのが当然であろう。しかし参宮後は伊勢講の旅とは呼びがたいところがある。たとえば、『伊勢道中記史料』所収の天保六年（一八三五）『伊勢参宮日記』<sup>(18)</sup>によれば、同行三十人だったようであるが、参宮行事が終了したあと、八人は松坂を過ぎて六軒から帰国の途につき、残り二十二人は大和廻りから紀州高野山・堺を経て、大坂・京都見物をして、中山道へ出て帰国している。その時の参宮道中構成員の事情によるものであるが、旅の日程と周遊地は一定のものではなかった。

安政六年（一八五九）十一月十五日に、陸奥国田村郡北宇津志村の男たち七人が二カ月半に渡る大旅行をした様子を、『安政末年伊勢参宮道中記』<sup>(19)</sup>から見ておこう。十一月十五日に北宇津志村から三春へ出た一行は、二十一日には江戸着。江戸で二日間の見物をしたあと、二十三日に江戸を出て、基本的には東海道筋を西へと向った。途中、横浜見物、大山参り、久能山参詣、秋葉山や鳳来山にも参詣、豊川稲荷にも詣でて、名古屋から佐屋路を経て、十二月七日には舟で桑名へ、その後参宮街道を通って九日暮れに伊



勢の御師子富右膳太夫宅に着いている。十日と十一には御師方に逗留して内宮・外宮等を参拝。十一日中に山田から田丸を経て熊野街道へ入った。尾鷲から八鬼山峠をこえて、新宮、那智山、熊野本宮を参拝しながら、十九日には高野山。高野山から橋本へ下り、大和へ入って吉野山、多武峯、初瀬、三輪をまわって二十三日には奈良見物をしている。大和では西大寺、西の京、郡山、小泉、法隆寺などを経て、当麻寺から竹之内峠を越えて堺、そして二十五日昼に大坂に入り、半日の大坂見物をしている。

大坂からは船中二泊して四国丸亀へ渡り、新年の元旦を金毘羅参詣にあて、普通寺・弥谷寺参拝ののち、正月二日朝また丸亀から船に乗り、室津へ四日朝上陸している。室津からは山陽路を東へ向い、姫路、明石、兵庫、西宮を経て、西宮からは大坂道を辿らず瀬川・郡山・悪田川から山崎・淀へと出て、正月九日に伏見から京都入りをしている。京都では四泊して京見物や土産物の購入などに費し、十二日に京都を出て、大津、膳所、草津へと入り、草津からは中山道に入って帰路を急いでいる。

往路と異なる中山道を探ったのは、洗馬から善光寺路へ入るためであったようで、二十一日に善光寺参詣、その後

は上田、小諸、軽井沢、高崎、前橋、足尾、そして日光へ二十六日に到着。日光見物ののちは、大田原・白河・三春へと往路に戻り、一月晦日に北宇津志村へと帰着している。

ここでは、大和の安堵村の例と武蔵の喜多見村、そして陸奥の北宇津志村の参宮日記をとりあげたが、安堵村の場合には出発から四日目に伊勢に入り、往路とは異なる東海道廻りで、九日目に帰村している。喜多見村の弘化二年の国三郎らの旅は、十六日目に伊勢へ到着、その後は周防国岩国まで足をのばし、やはり往路とは別のコースを辿って八十七日目に帰着している。また北宇津志村の七人衆の旅では、二十五日目に伊勢参宮し、熊野から高野山を経て大坂から讃岐へ、多渡津を最西端に、室津から山陽路を東し、七十六日目の帰村となっている。いずれも往路と復路は異なっており、若干の寄り道はしているものの、目的地である伊勢へは直行するかたちをとり、参宮後に時間をかけて、各地を周遊・参詣しているといえる。

#### 四 宿場と宿屋

道中日記は、筆者の個性や目的によって、記述された内

容も一様ではない。たとえば前節で見た文化元年（一八〇四）の東安堵村の「伊勢参宮道中元締帳」は会計担当の帳面であるから、毎日の記載も一行の茶代、昼食代、舟賃、勸化代、宿泊費など、道中の支出が詳細である。会計担当者でなくても、弘化二年（一八四五）の田中国三郎の「伊勢参宮覚」には、わらじ代、菓子代、駕籠賃、渡し賃、賽銭、ちり紙代、昼食代、宿泊料など、いわゆる小遣銭を含めた旅費が実に几帳面に書きとめられている。またここでは具体的には紹介していないが、道中の食事献立を中心に書き綴った弘化五年の「伊勢参宮献立道中記」<sup>20</sup>もよく知られている。

しかし、道中記は、当事者の思い出や楽しみのためというよりも、のちに旅行する人々のための役に立てられることも意識して書かれていると言つてよいから、とくに宿駅間の距離や旅籠についての情報は重視されている。

一例を「安政末年伊勢参宮道中記」から、その一部を示してみよう。

安政六年<sup>未</sup>十一月十五日罷立

一 北移より

一三春江四り半 十五日晩泊り、伊勢屋作介殿、旅籠

一 百七拾文

一 赤沼江三<sup>江</sup>り

一 守山江<sup>江</sup>壱り半 此所二万石御城あり、松平大学頭殿、

田村郡、江戸ヨリ五拾六<sup>六</sup>り、大元明王様有、此間川

有、橋錢七文

一 須加川へ壱り半 十六日晩泊り、旅籠式百参拾文、

ひる出る、御本陣加納屋住之江永介殿

これは記録の冒頭の部分であるが、基本的には宿場の名称と宿場間の距離と宿泊した旅籠の屋号人名と宿賃が記されている。こうして道中記に記される里程はもちろん歩いての実測距離ではなく、あらかじめ入手していたと考えられる道中案内記等の情報であり、また当人の体感確認した里程ともいえよう。この「安政末年伊勢参宮道中記」の場合、宿場名の表記には当て字や変え字、また東北弁の発音にもとづくと考えられる記載も見られることから、道中案内記どおりの書き方でもないことが判明する。これは日記筆者の文字知識の披露とか、現地での地名の発音や方言の聞き取りの表記など、記録そのものさへ楽しんでいたのではないかとの想像も成立する<sup>22</sup>。

宿場間の里程は、一日の行程を考えるとときには極めて重

要であり、道中案内記や案内図には必ず記されている。実際の道中では峠や河川があつたり、寄り道したり、参拝や見物の時間も考慮されるので、旅人の一日の里程は同じではない。

『安政末年伊勢参宮道中記』の記載に従って、七十六日間  
の里程を書きあげてみると、つぎのようである。

旅の初日は見送りなど伊勢講の出発儀式もあつてか四里半である。しかし、その後は見物や宿泊地の都合などによると考えられる歩行距離の減少を除くと、八里から十一里位は歩いている勘定である。しかし、帰路の京都滞留後は、連日のように十里以上を踏破しており、帰路は極めて足早であつたことがわかる。これは男たち七人の旅で、しかも十里以上を歩けるような健脚そろいであつたから、そうした旅程が可能だつたともいえる。

『安政末年伊勢参宮道中記』は、宿泊したほとんどの旅籠に、「上々」「上」「中」「下」などのランク付を朱筆で記している。この判定基準が何によつたかは未詳であるが、旅における旅籠の意味は極めて重要であつて、道中記の宿屋の評価は、次回の旅行の大切な参考要件であつた。

旅籠の評価については、こうしたランク付よりも、具体

的に道中記のなかで書き記した場合も少なくない。寛政三年（一七九一）の東安堵村の『伊勢参宮諸事覚之帳』には道中での宿屋情報を分析したのか、次のような記載がある。

①大津宿はりや喜右衛門ハつふれ申候ゆへ、万や市兵衛二而中飯いたし申候、此宿やハ甚むさくろしく、猶其上籠抹二いたし候ゆへ、重而ハ此宿無用也

②明星、河内や六次郎、此宿も少し籠抹方二御座候、名張宿も甚賃銭のわりニハ籠抹二御座候、是も此上ハかへて可然候、郡山、畳や元次郎も甚あしく候

③松坂大和や、是ハ甚地走二而、皆々氣之毒成くらひニ御座候、重而ハ茶代等氣付いたし候而可然候、長池大和や十兵衛、是も地走二候、是又茶代等心付可然候

旅籠は宿泊所であるが、多人数の旅の場合は予約しての中食場ともなる。①の史料では中食予定の宿が倒産したので、代りの宿屋を頼んだが、むさくるしくて応対もよくないので、次回からは頼まないとなつてゐるが、たしかに文化元年の伊勢講の折は、川越屋久二郎方で中食してゐる。

②の史料でよくない宿屋とされた明星、名張、郡山の三軒について、東安堵村の天明四年と文化元年の記録を対応させて見てみると、明星での宿泊であつたのを、旅程を組

み変えて、櫛田で中食となっている。名張と郡山の旅館もよくないとの評価であったが、天明四年と文化元年では変化していないので、宿屋側が待遇を改善したのか、何らかの事情で宿替えまでは至らなかつたようである。

③の松坂と長池宿の同じく大和屋を名乗る宿屋は、大変に接待がよろしくて、気の毒なくらいだとの評価であるが、さすがに経営も上手なのか、潰れることもなく、東安堵村の伊勢講も愛用し、記述どおりに茶代などの心付けをしている。

旅籠は宿泊したり中食を提供するなどのほかにも、極めて重要な役割を果たしている。東京都世田谷区教育委員会刊の『伊勢道中記史料』所収の天保六年（一八三五）『伊勢参宮日記』によると、

一廿二日天氣、佐屋出立

舟番所二而改を請、夫より舟二乗、四十六人乗之舟壹艘借切、代巻貫四百六文、祝儀三朱ト式百文、桑名江上り堺屋三右衛門ニ□中食、宿より龍太夫迄飛脚出ス、同神酒出候故、三拾人にて金式分式朱中食代、酒代共遣ス、飛脚賃は遣スニ不及候

とあり、桑名で中食をとった堺屋三右衛門方から、伊勢の

御師龍太夫へ飛脚を出している。桑名から先は船旅がなく、陸路で伊勢への到着時刻等がたしかに予定できることから、伊勢の担当御師宅へ日時などを飛脚便で伝えた。この情報を受けて御師宅では出迎えや受入れの準備ができたのである。ここではなじみの宿屋であったためか、飛脚賃を宿屋側が負担している。

前述の伊勢講では、桑名から伊勢の御師へ飛脚を出して到着予定を知らせたところ、早速翌日の夜の松坂宿での泊りの旅籠へ、御師龍太夫の手代が挨拶にやってきている。「酒迎」として、樽二つ、ほら二本、海老五つを持参したのである。そして、松坂の旅籠で「金高之掛合等被致候」とあるから、伊勢の御師宅や両宮参詣の費用をどれほどにするかについて相談し、その結論を手代は御師宅へ戻って報告し、受入れ準備に取りかかったのであろう。

伊勢到着の二十四日には、官川の茶屋まで手代が出迎えに来ており、そこからは一同駕籠に乗り二見見物ののち御師龍太夫宅へ着き、伊勢独特の手厚い接待を受けている。同前の『伊勢参宮日記』には、伊勢出立の二十八日のこととして、「朝飯済四ツ時過、龍太夫挨拶に被出、講金請取書被渡、一万度御祓荷物二作り、江戸廻し之積二頼置、但

運賃、荷作共金式分相渡ス」とある。<sup>27)</sup>これは宿所である御師宅から土産などの荷物を江戸廻しで故郷へ送ってもらう約束をしたこと、荷作りまで頼んでいることがわかる。専門の業者と宿屋とは提携していたということであろう。

『安政末年伊勢参宮道中記』には、安政六年十二月十一日の出来事として、次の記載をしている。<sup>28)</sup>

極月十一日朝、内宮様増社八十増社有、参詣仕候、右膳太夫様江<sup>29)</sup>帰り、山役銭三拾六文御祓請申候、京都扇屋手代伊介様ど申者二御頼ミ申候、但賃銭之儀者、百目二付拾八文の割に、京都江<sup>30)</sup>相送り申候

子富右膳太夫は内宮前の御師であるが、京都の旅籠に予定している扇屋莊七の手代が、伊勢の御師右膳太夫宅へ来ており、扇屋手代伊介のはからいで、右膳太夫宅から京都へ荷物を送っているのである。京都へ送った荷物は、おそらく京都の表具屋で表装をしてもらう品々だったのでないかと考えられる。

旅人が自分の荷物を問屋便を通じて、地元や旅先地へ送るとき、その拠点になるのが、旅籠（宿屋）であった。旅籠は手紙や荷物運送にあたり荷主の身元保証の意味をになつたし、届けられた荷物等を保管する役割もあつた。

中食や宿泊はもちろん飛脚便、荷物の発送・受取など、旅籠は重要な役割を果たした。とりわけ伊勢講などの団体旅行ではあらかじめの予定を立て、予約連絡なども不可欠ではなかつたかと考えられる。東京都世田谷区教育委員会刊の『伊勢道中記史料』に天保十二年正月吉日付の『東海道宿屋名前付』が収載されており、表紙は「大和路之分も覚有之候」との但書も見える。<sup>30)</sup>おそらく同年同月十四日に出立した同行十四人の伊勢講の準備段階でつくられたものと考えられる。各宿場毎に単数または複数の宿屋名が書きあげられており、同年の『伊勢参宮日記』<sup>31)</sup>と照合すると、中食または宿泊所として、かなりの割合で一致している。<sup>31)</sup>

## 五 道中の路銀と両替え

東京都世田谷区教育委員会刊『伊勢道中記史料』には、「〔解説〕世田谷の伊勢講と伊勢道中について」と題する池上博之氏のすぐれた論文が付されている。この論稿の中で、道中の費用という項目をたてて、池上氏は道中記の分析から次のようにまとめている。<sup>32)</sup>

江戸時代の旅で最も費用がかかるのは宿泊代で、晩と朝

の賄いつきの旅籠と素泊まりの木賃賃では値段にも違いがあるし、また主要な宿場や京・大坂などの人の集まる場所では値段が高く、脇住還筋などでは相対的に安くなっていると指摘している。そして、弘化二年（一八四五）の道中記の分析から、旅籠賃はこの時代には高い所で一泊二〇〇文超、安いところは二三文とさまざまなランクがあると述べている。

弘化二年から十四・五年後のことになって物価も上がっているし、また旅籠のレベルも同じとはいえないが、『安政末年伊勢参宮道記』から、旅籠賃をみておこう。<sup>35</sup>陸奥の国からの旅であるが、もっとも高いのは江戸で二泊して六一六文を払っている。一泊三〇〇文以上ということになるが、これには一日目の中食代や茶代なども含まれているのかもしれない。つぎに高かったのは久保田宿や川崎宿での二七二文。多いのは二三〇文から二〇〇文であるが、本陣など高級旅籠にも泊まってはいるが、本陣でも二〇〇文のところもある。京都では四泊し一貫文を宿代として払っているの、一泊二五〇文である。安いところでは一七〇文から一八〇文。北宇津志村の一行は途中木賃宿にもしばしば泊まっている。木賃は安いところで四八文で、だいたい

は六〇文から八〇文の間となっている。長旅であるからお米を持参している訳ではないので、米は相場を買う。ほぼ一升一三〇文から一六〇文位であるが、熊野の山中の村では一七五文とか二一〇文の相場のところもある。もちろん一升代を支払う訳ではないので、木賃宿の宿代は不明なところが多い。しかし、中には丸亀の例で、「木錢六拾五文、米壹升百四拾五文、米壹升百三拾六文なり」とか、姫路での「木錢七拾五文、米壹升百三拾五、米壹升百七拾六文宛」<sup>36</sup>の記載もあり、いわゆる旅籠賃よりはやや安いと言えよう。ただし、木錢六拾四文、米一升一七六文なのに、一人前一六文を払っている例もある。

もちろん一番高額なのは、やはり伊勢の御師宅への支払いで、『安政末年伊勢参宮道中記』によると、御供代、落し物共二、一金百疋差上申候」と、単なる宿屋代だけではないものの、二泊で一〇〇〇文の支払いである。<sup>36</sup>これに対して新宮や那智山で宿坊に泊まったりしたときは、一三三一文とか一五七文と割合に安い金額となっている。<sup>37</sup>

池上氏は前掲の論文で、宿代のほかにも、草鞋代が一〇文から二〇文、渡河や渡海の橋錢・渡し錢、舟賃の出費も小額なものから、割高なものまで、合計では旅籠代何泊分

にも相当する。また茶店での茶代、菓子代、酒代やちり紙代、髪結代、旅装具費なども必要で、社寺参詣の旅であるから餐錢や拝觀料、案内賃、また遊興費なども少なくないとしている。その結果、弘化二年の旅費計算では、総計三五貫余り、金では五兩二分位になると計算している。<sup>(38)</sup>『安政末年伊勢参宮道中記』では小遣錢等までの記載はないから、旅の一人当たりの総費用はわからないが、日記末に「参宮みやげ物覚」があり、八三方条にわたり、総計額を「メ金式分ト錢拾四貫九百拾式文、金切式兩三分壹朱ト百拾式文」と自分で計算している。<sup>(39)</sup>土産物代だけで二兩三分余りになるという数字である。これは日記の筆者虎之介の個人的な嗜好によって高額な土産代となったものであろうが、こうした実例があったことは確認しておきたい。

ところで、道中日記には、これまで述べてきたように、ほとんどが錢高で記載されており、実際の支払いも錢で清算されている。しかし、多量の錢貨をかかえて旅することは、その重量から考えると困難である。金貨または銀貨で持ち歩いて、道中で錢貨と両替えした方が便利である。この両替えについて、大和国東安堵村の寛政三年（一七九一）『伊勢参宮諸事覚之帳』は、次のような心得が記されている。<sup>(40)</sup>

一道中二而日々金子三、四兩ツ、世話人中持出、錢相場間合、途中二而も兩かへいたし、中飯、宿泊り宿へ錢二而持参いたし候而可然候、惣体宿や又八宿之、辺二而錢かへ候事ハ、凡壹歩二付錢廿文斗ツ、も、宿無之処トハ直合違申候、自今心得之ため、書記置物也

このときの東安堵村の伊勢講は、四十八人も多勢の旅であったから、会計方は一日に三兩から四兩分ずつを両替すべしと書かれている。しかも、両替えの相場にも気を配り、宿屋か宿屋のある宿場での両替えをするようにとの注記である。

東安堵村では伊勢講だけではなく、北西国とか南西国とかに分けて、西国三十三カ所の靈場廻りを団体で行っているが、弘化五年（一八四八）の『南西国道中覚帳』は、「金銀両替覚」の記載があり、何月何日にどこで、いくららの相場で両替えしたかが判明する。<sup>(41)</sup>

三月二日  
一式朱壹ツ 岳寺二て両替  
代八百十文

同四日  
一式朱巻ツ　かうずへ村

代七百九拾文兩替

同

一式朱巻ツ　仁柿青木源助

代七百八拾文

同五日

一式巻分　太夫様

代

同五日

一式朱巻ツ　田丸和泉屋

代七百六拾四文

同七日

一式朱巻ツ　濃尻

代七百八拾文兩替

(中略)

同廿日  
一式朱巻ツ　平野ニテ

代八百四文

ならし相場七百九拾七文

メ拾五メ百四拾八文

だいたい一日に一回か二回、二朱金を八〇〇文前後で  
兩替して、道中の支払にあてている。この日記ではほぼ四  
人分ずつの路銀が記録されているから、兩替えも四人分を  
念頭においてなされたのであろうか。

ところで、武蔵国喜多見村の弘化二年の田中国三郎の「伊  
勢參宮覚」の途中にも兩替の記録がある。

覚

正月廿五日

一金式朱両かへ　錢八百六文　箱根宿ニテ

同廿六日

一同式朱　同八百拾六文　吉原宿ニテ

廿八日

一金巻歩　同一貫六百廿四文　岡へ

二月三日

一金巻分　錢一貫六百三十六文　御油

七日

一金式朱　錢八百拾式文　伊勢津

九日

一金式朱　同八百十二文　イセ御師

十一日

一金式朱　同八百八文　伊勢町



十二日 同八百十二文 イセつばや

十三日 八百文 イセ松坂

十六日 八百廿五文 二条村ならの

十九日 一金貳朱 七百八十文 四軒茶屋

廿一日 一金貳朱 七百八十文 高野にて

(後略)

これによると、ほぼ二朱金一枚を錢に両替えするのが一般的だったようで、時に二朱金二枚か一分金を両替えした。ということは一歩(分)金か二朱金を道中では携行したということになる。両替えは宿場内の両替屋かまたは御師宅を含めた宿屋でも両替え業務がおこなわれたのである。

以上が路銀の概要であるが、臨時的な費用についても言及しておこう。江戸時代の旅は基本的には陸地の街道は歩き旅であるが、時に駕籠や馬などのいわゆる乗物を利用することがある。たとえば、弘化二年に参宮した田中国三郎は、一月二十三日に梅沢より小田原まで三四八文で、二十

五日に箱根から三島まで五〇八文で駕籠に乗り、また翌二十六日にも江尻から久能山まで駕籠に乗り六〇〇文を支払っている。また婦路のことであるが、四月九日に洗馬宿から善光寺への松本街道へ入り、四里ほどを馬に乗り二〇〇文を払っている。駕籠や馬に乗った理由は不明であるが、体調がよくなかったか、駕籠昇きや馬子に上手にすすめられたかであろう。ただ駕籠賃や馬代は決して安くはなく、たびたび利用すると路銀がかさんでくることになる。

室内賃も高額ではないが、しばしば支払いの記録がある。弘化二年の『伊勢参宮覚』でも、久能山、奈良、法隆寺、高野山、宮島、須磨寺、大坂、京都などで案内人を雇って見物・参拝したことが記されている。『安政末年伊勢参宮道中記』の方で、案内賃にかかわる記述を具体的にあげてみよう。

(安政六年十一月二十一日)

○此日案内取、江戸見物仕候、案内銭貳百五拾文、何人二而も同じ

(同十一月晦日、久能山)

○案内取御参詣仕候、案内銭貳百文、何人二而もおなじ

(同十一月晦日、府中淺間社)  
○案内銭拾貳文宛二御座候<sup>48</sup>

(十二月十六日、那智山)  
○宿坊より案内出る、熊野様懸越なり<sup>49</sup>

(十二月十七日、本宮)  
○是より案内出る、熊野大神宮様御参詣仕候<sup>50</sup>

(十二月十九日、大滝)  
○此より高野案内出る、銭いらす<sup>51</sup>

(十二月二十日、高野山)<sup>52</sup>  
○じづ屋より案内出る

(十一月二十一日、吉野)  
○此所より案内取見物仕候、案内銭何人二而も三拾貳文<sup>53</sup>

(十二月二十三日、奈良)  
○廿三日朝案内取見物仕候、案内銭何人二而も八拾八文<sup>54</sup>  
なり

(十二月二十五日、大坂)  
○案内取大坂見物仕候、案内銭百六拾四文<sup>55</sup>

(安政七年一月十日、京都)  
○正月十日朝案内取見物仕候、あん内銭貳百文、何人二

而もおなじ<sup>56</sup>

(同年一月二十七日、日光)  
○正月廿七日朝案内取御参詣仕候<sup>57</sup>

以上は、伊勢関係の案内を除いたすべての案内記録であるが、記録もれなどもあるかもしれない。江戸・奈良・大坂・京都などの見物カ所の多いところでは、一日または半日などの案内銭を支払って、要領よくまた見落としない観光をしている。「案内取」という表記がそれであるが、旅籠に依頼して案内人を雇っている。「何人二而も」という記載は、一人の案内人あたり一団体何人でも案内銭は同じということ、同行者だけでなく宿などで知り合った者でも、同じ団体として入り交じって見物した場合もある。「あん内ちん何人にても老日貳百文也、出羽庄内の人老人まぢり五人にて廻り」などの記述がみられる。

寺社境内や山内の案内者もある。この場合は山役銭などを払った場合に無銭の案内が宿坊などからつく場合と別に案内銭を支払う場合、法隆寺などのように一山とは関係のない有料の境内案内人などの場合もあったようである。また名所や境内などの案内人とは異なり、道案内、街道案内人などもあった。天保六年(一八三五)『伊勢参宮日記』によれば、二月三日に奈良で案内人を雇っており、「是より大坂迄之間五、六日分案内を頼申候、但し大坂迄案内老貫五百文」の記載がある。<sup>58</sup>奈良からは西大寺、招提寺、西

之京、郡山、法隆寺、当麻寺、飛鳥、多武峯、吉野、五条、橋本、高野山、堺、住吉を経て八日に大坂につき、「此所にて、奈良案内巻貫五百文賃銭払、相返し申候」と、六日間に渡った案内者に案内銭を支払って解放している。

## 六 旅における「伊勢」と地域の魅力

伊勢参宮の道中記をみてみても、参宮前と参宮後で、旅のあり方が変化しているように見えない。参宮前・後ともに、名所の見物や社寺の参拝、土産物の購入、名物・珍味などの食味、遊興、知識欲等の充足は変わっていない。歩く旅であるから、身体的な疲労や不調はあるものの、地域色豊かな各地をめぐる旅は、精神的な喜びや知的な満足感が高かったと考えられる。

しかし、伊勢参宮を称する道中での、伊勢における数日間、地域の伊勢講を代表しての旅であるから、伊勢滞在には特別な意味があった筈である。伊勢講の成立や近世村落史等における位置づけについては、ここでは論じないが、全国の伊勢講は伊勢の御師との間に親密な関係をもっている。たとえば本稿でしばしば史料引用している武蔵国喜多

見村などの講は龍太夫、陸奥国喜多宇津志村の講は子富右膳太夫、大和国東安堵村の伊勢講は橋爪孫太夫などと、特定の御師との結びつきをもって伊勢講は活動している。そして伊勢講の目的は伊勢参宮にあるが、伊勢における参宮の一切の面倒を見てくれるのが、御師である。

伊勢講の一行が伊勢へ到着の前から、出迎えの挨拶や値段交渉などは御師の手代があたる。そして宮川を渡し船で渡ると、手代が駕籠を持たせて迎えにきている。御師宅に直行するか、二見などを先に廻るか、いずれにしてもすべて駕籠と案内がつき、あらかじめ食事や茶店などもほとんど予約されている。御師宅では、正装した御師と手代が丁寧に迎え、参宮者は、ほぼ金百疋（金一分）を奉納、ほかに山役銭、賽銭などを納める。もし太々神楽などをあげるには、講全体で金三十両前後も必要となる。食事は豪勢で、本膳、二の膳、三の膳、夜食膳など、山の幸、海の幸、菓子や酒など、参宮者たちの目を楽しませる料理がならぶ。料理の豪華さには参宮者たちも満足したようである。「伊勢参宮献立道中記」の筆者のように特別な食への関心の高いものだけでなく、多くの伊勢参宮日記には、こうした料理献立が書きとめられている。太々神楽奉納の参宮者たちには

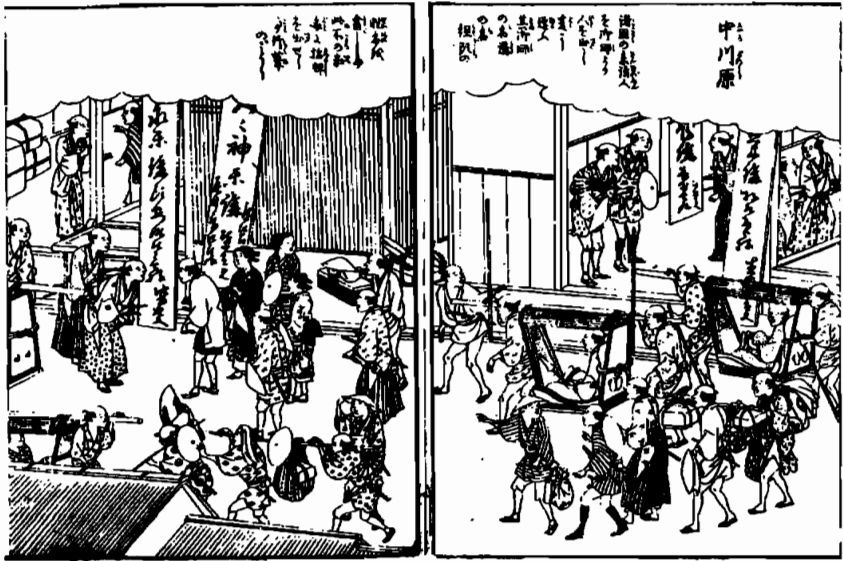
さらに豪華な食事がつき、夜具も「講中の者へ残らず揃ひの絹夜着を出す」という接待である。

伊勢講にとつては神樂の奉納は重要な講参拜の行事であるが、太々神樂など高額な費用が求められるから、余裕のある講でなければできない。神樂奉納も御師宅で行われるが、正装での参列が必要となる。長い旅の道中をしてきたものにとつて、髪月代を剃り、清めの入湯はしても袴まではなかなか用意できない。御師側では、これらの人々に袴を損料をとつて貸し与え、正装で参加させている。武蔵国喜多見村の国三郎らは神樂奉納はできなかったが、「下総国申嶋郡太々神樂有しを、よき折からと拝見す、神前ニゆがまをかけ、火をたき、四方のはしらへ、あか地・くろ地ニきんの菊、きりの門有物でまき、そと三方ニ三十人程えはししたたれ、めい／＼ニ小なつゞみ、五寸計のはちにて、打ならしなからうたいをうとふ、たいこふへにて六十計のみこ、右の方より金にしきのしよふぞく、左り方よりしろのしよふぞく、替り／＼ニ出おとりける、神前の次之座敷三十式疊敷、太々の約一所ニ此座敷拜する也」と、傍見した。伊勢講の一大神事であるから、代参者としてはよき折の見学であり、地元へのよき情報ともなったことであらう。

う。

御師による伊勢での応接は、参宮者たちに特別な感慨をあたえたことは間違いなく、とくに歩くのを基本とする旅人たちが、御師の手代の迎えにあつた途端、ほとんどが駕籠で案内される接遇は印象的なことであつたに違いない。『伊勢参宮名所図会』巻四所収の「中河原」の景は、そうした御師手代の駕籠昇同伴の出迎え場面である。もちろん、この図柄に見えるように、参宮者全員が駕籠に乗つたわけではなく、御師宅に宿泊しない者などは歩行である。内宮、外宮や撰社・末社の参拜はもとより、二見浦や朝熊めぐりも駕籠であつた場合もある。弘化五年（一八四八）三月二十五日に伊勢入りした讃岐国志度浦太々講の一行は、翌二十六日に嘉永改曆のことを知るが、岩淵岡田太夫宅で丁寧な応接を受け、二十七日に二見へ出かけた。「手代太夫中村氏案内、講中残らず駕にて、二見浦見物、午の刻とおほしきころ、二見松崎屋新助方にて仕度を出す。講中駕敷二十二挺」と記しているが、夜遅く御師岡田太夫宅へ戻り、駕籠昇たちが酒手を欲したので、天保銭一枚ずつを与えている。

二十挺以上の駕籠を連ねての見物・参詣は、実に豪勢で



伊勢中河原にて参宮者出迎えの図（『伊勢参宮名所図会』より）

あり、そうした光景を実見した歩きの参宮者にも、伊勢の  
 応接の特別さを見せるものであった。また御師宅出立の時  
 も御師の太夫の挨拶、「夫より中河原茶屋迄駕籠二而送り、  
 中村四郎兵衛殿も中河原之茶屋二而、餅菓子三ツツ、其外  
 酒肴被出候而、暇迄致し、夫より相渡り候迄被見送候」と  
 というように、出迎えと同様な丁重の上にも丁重な見送りを  
 演出して、伊勢講代参を労っている。

伊勢講による参宮において、伊勢での参詣や儀式参加は  
 とりわけ大きな意味があり、それが参宮の目的であったと  
 いてもよい。だから伊勢での儀礼や御師による接待がす  
 めば、任務完了として帰国の途につく訳であるが、実際は  
 伊勢参宮の名目で伊勢から諸国めぐりの旅へと向かってい  
 ることが、参宮道中日記から判明する。伊勢までの往路も  
 伊勢からの帰路も、各地の名所旧跡をめぐり、日本各地の  
 ささまざまな地域文化を、自分たちの目で見、話を聞き、異  
 文化体験をしながら、各地の情報を故郷へと持ち帰る旅が、  
 すなわち伊勢参宮の旅であった。

もちろん、こうした旅が可能となる旅のシステムが日本  
 全国に出来ていること、そして何よりも日本各地に旅人を  
 引きつける個性的で魅力的な地域文化が形成されているこ

とが確認されるのである。また、江戸時代中後期の庶民たちが各地の地域文化を学び楽しむとするとする旅観を成立させてきていることが、伊勢参宮道中記からうかがうことができるのである。

### 補註

- (1) 『邦訳日葡辞書』(岩波書店刊、一九八〇年)。本書五九四～五九五頁には旅に関する十五項目の語が見えている。本書は、一六〇三年に刊行された長崎版日葡辞書の日本語訳であり、日本イエズス会がキリスト教普及に携わる宣教師の便宜のために編集された辞書であるが、十六世紀における日本語の状況概要を知る貴重な文献である。
- (2) 『安堵町史』史料編下巻(安堵町史編纂委員会編・安堵町刊、平成三年四月一日)。本書の中に「道中記編」の項があり、各種の記録が翻刻し収載されている。
- (3) 前同書九二一～九二六頁。
- (4) 前同書九二六～九三四頁。
- (5) 前同書九三四～九四六頁。
- (6) 前同書九四六頁以降。
- (7) 『伊勢参宮道中記』(安堵町所蔵・今村家旧蔵文書)、『安堵町史』史料編下巻九二二頁。
- (8) 『安堵町史』史料編下巻九二七頁。
- (9) 前同書、九三四～九三五頁。

- (10) 前同書、九三二頁。
- (11) 『伊勢道中記史料』(東京都世田谷区教育委員会刊、昭和五十九年三月十七日)所収、四四～四六頁。
- (12) 前同書、池上博之氏「解説」世田谷の伊勢講と伊勢道中について」論稿より。
- (13) 東洋文庫一四〇、小山松勝一郎編訳。
- (14) 『安堵町史』史料編下巻、九二二～九三二頁。
- (15) 前同書、九三三～九二五頁。
- (16) 前同書、九三五～九四〇頁。
- (17) 『伊勢道中記史料』(前掲書)一～四二頁。
- (18) 前同書、一五二～一七六頁。一六一頁に「廿九日一里雨天、六軒、是より大和廻りはせ越江掛り、大和廻り廿式人、婦国人八人」とある。
- (19) 『奈良史学』第二六号(二〇〇九年一月三十一日刊)所収史料、鎌田道隆翻刻。
- (20) 『日本庶民生活史料集成』第二十巻所収。同書五九九～六二二頁。
- (21) 『奈良史学』第二六号、九九頁。
- (22) 前同書、史料解説、九八頁。
- (23) 原本『伊勢参宮道中記』(奈良大学文学部史学科蔵)に見える。『奈良史学』第二六号の史料翻刻は、朱書文字は( )に入れて示している。
- (24) 以下三点の史料とも『安堵町史』史料編下巻九三二頁。
- (25) 『伊勢道中記史料』一五七頁。

- (26) 前同書、一五七頁。
- (27) 前同書、一六〇頁。
- (28) 『奈良史学』第二六号、一〇五頁。
- (29) 『伊勢道中記史料』一二二～一二九頁。
- (30) 前同書、九九～一二二頁。
- (31) 『東海道宿屋名前付』には、各宿場に複数の宿屋を書きあげている例が多く、いずれかの宿屋で宿泊したり、昼食をしたりしているのであるが、名前帳にない宿屋を利用している例もある。すなわち、名前帳では大磯宿に山城屋勝右衛門とふじや四郎右衛門の二名が書きあげられているのに、『伊勢参宮日記』では大磯宿での昼食は升や定右衛門方を取っているなどである。
- (32) 『伊勢道中記史料』二三七～二三八頁。
- (33) 『奈良史学』第二六号、九九～一二七頁より。
- (34) 前同書、一一〇頁。
- (35) 前同書、一一一頁。
- (36) 前同書、一〇五頁。
- (37) 前同書、一〇六頁。
- (38) 『伊勢道中記史料』二四〇頁。
- (39) 『奈良史学』第二六号、一一八～一二二頁。
- (40) 『安堵町史』史料編下巻、九三二頁。
- (41) 前同書、九五八～九五九頁。
- (42) 『伊勢道中記史料』一五～一六頁。
- (43) 『伊勢道中記史料』一～二頁。
- (44) 前同書、三七頁。
- (45) 前同書、二、一一、一四、二二、二五、二八、三三頁など。
- (46) 『奈良史学』第二六号、一〇〇頁。
- (47) 前同書、一〇二頁。
- (48) 同前。
- (49) 『奈良史学』第二六号、一〇六頁。
- (50) 同前。
- (51) 前同書、一〇七頁。
- (52) 同前。
- (53) 前同書、一〇八頁。
- (54) 同前。
- (55) 前同書、一一〇頁。
- (56) 前同書、一一二頁。
- (57) 前同書、一一六頁。
- (58) 『伊勢道中記史料』三三二頁。
- (59) 前同書、一六二頁。
- (60) 前同書、一六五頁。
- (61) 『伊勢参宮献立道中記』(『日本庶民生活史料集成』第二十巻所収) 六〇六頁。なお、同書六〇九頁、三月二十八日の記事にも「前夜の絹揃ひ夜具四十枚出す、熱酔に及び、衆人前後を知らず伏す」と、高価な絹の夜具の接待で、全員が熟睡できたと記している。
- (62) 前同書、六〇八頁。
- (63) 『伊勢道中記史料』九頁。田中国三郎らが伊勢を出立する二

月十二日にこの神楽を見物している。

(64) 『伊勢参宮献立道中記』(三一書房刊『日本庶民生活史料集成』第二十卷所収) 六〇六頁。

(65) 天保六年『伊勢参宮日記』(世田谷区教育委員会刊『伊勢道中記史料』所収) 一六〇頁。